

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ギャロン・チベット族における「☒」の記憶と資源化：
四川省丹巴県の「☒」を事例として

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2017-12-26 キーワード: 作成者: 松岡, 正子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00008639 |

ギャロン・チベット族における「碉」の記憶と資源化 — 四川省丹巴県の「碉」を事例として

松岡 正子
愛知大学

はじめに

本稿は、千年以上の歴史をもつという巨大な塔「碉」を対象として、ギャロン・チベット族におけるその記憶と資源化について論じるものである。

「碉」は、碉楼、古碉、高碉とも呼ばれる高さ十数m～数十mの石積みの塔である（以下、碉楼と記す）。蔵彝走廊地区¹⁾とよばれる、青藏高原東部の海拔2,000～4,000mの峡谷地帯に分布し、そこにはチャン族やギャロン・チベット族等が居住する²⁾（図1）。しかし、近年、碉楼は西藏自治区南部においても次々と発見され、また石碉だけでなく土碉もあり、残存する碉楼は遺跡も合わせると2,000～2,500に達するという³⁾。2012年に刊行された石碩らの『青藏高原碉楼研究』（以下、『青藏高原碉楼』と記す）は、新発見が続く碉楼に関して1940年代から近年までの調査の成果、および考古学や歴史学、地理学的視

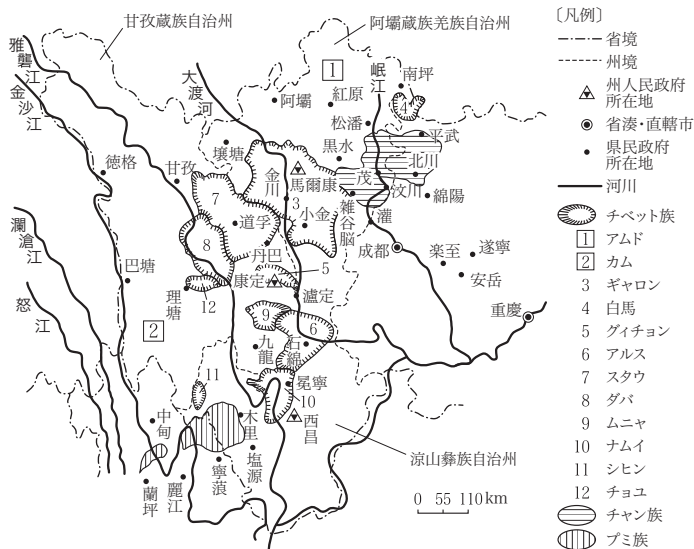


図1 四川省のチベット族とチャン族

出所：四川省人口普查辦公室編『四川藏族人口』（中国統計出版社，1994年）4-6頁，孫宏開「六江流域的民族語言及其系属分類」（『民族学報』1983年第3期），郝時遠『中国少数民族分布図集』（中国地図出版社，2002年）等をもとに筆者作成。

点を主とした先行研究をほぼ網羅し、それらをふまえて今後の課題を提起した大著である。本稿では礪楼に関する基礎的データは主にこれに基づき、住民への聞き取り等は筆者の現地での聞き取り（2015）による。

『青蔵礪楼』で石碩が提起した課題の中で筆者が目にするのは、第5章「一つの伝統的な見方に関する疑問：礪楼は防禦が最初の目的であったのか？」である。青蔵高原の礪楼は、清代乾隆年間にギャロン土司が蜂起した2回の大小金川事変において難攻不落の「軍礪」として清軍の前に立ちはだかり、清王朝に巨大な損失を与えた。そのイメージは後世に広く伝えられ、礪楼の目的を外敵に対する防禦とすることは、多くの研究者にとっても通説であった。しかし、残存する礪楼の建造年代が大小金川事変以前の明清期のものが多いことや、古い形態を残す鮮水河流域（四川西部の雅砻江支系）の扎巴人の「礪房」（礪楼の形態をもつ石積み家屋）が神との関わりをもつこと等〔馮敏 2010: 380-387〕をあげて、礪楼の本来の目的は神を祀ることにあったのではないかとする。

筆者も2015年夏に丹巴でギャロン・チベット族調査をした際に、現地には扎巴人の礪房を連想させる低い礪があちこちにあつて頂上には神を祀っており、彼らはそれを家礪とよぶことを知った。そして家屋の横にたつ十数mの家礪の重要性に初めて気づいた。しかし、従来の礪楼研究は高い礪楼を対象とした研究がほとんどで、家礪について述べたものはあまりない。そこで本稿では、まず礪房および家礪に関する先行資料を整理し、現地での聞き取り調査によって礪にまつわる村民の記憶や語りを収集して家礪の視点から分析し、「礪」の意味について再考する。さらに、現在、村落で進む観光資源化において「礪」がどのように再生されているのか、或は再生されていないのか、論じる。

1 「礪」に関する先行研究

本章では、礪に関する近年の代表的研究として「丹巴古礪建築文化総覧」〔楊嘉銘 2004〕とそれをふまえた『青蔵高原礪楼研究』〔石碩・楊嘉銘・鄒立波 2012〕をとりあげ、家礪に関する研究を概観して、近年の礪楼研究における争点と今後の課題についてべる。

1.1 礪楼の概述と礪楼研究の問題点

『青蔵礪楼』の第1章緒論によれば、礪楼については、文献では岷江上流の冉駹部落の「邛籠」（『後漢書』南蛮西南夷列伝）が初出で、北朝の附国では「瓊」（『北史』附国伝）とある。分布地域はヒマラヤ山脈系と横断山脈系の2つに大別される。前者は青蔵高原の西蔵昌都地区、雅魯藏布江以南の林芝などと雲南の迪慶州、後者は青蔵高原東部の藏羌地区で、特にギャロン・チベット族地区に最も密集し、数量、類型ともに最多である。礪楼の類型は、材料面では石礪と土礪の2種があり、造形面では三、四、五、六、八、

十二、十三角形の7種で四角碉が最も多く、機能面では家碉、経堂碉、寨碉に分かれる。

碉楼は、清代乾隆年間の2回の大小金川事変によって国内に広く知られるようになった。当該地域はギャロン・チベット族の中心地で、碉楼群の攻略に苦戦した清朝は、北京の香山に碉楼を建てて攻略を演習した後、7年余をかけて漸く勝利したが、ギャロン側だけでなく清朝側も甚大な損失を被った。そのため碉楼は軍碉のイメージが強かったが、2005年『中国国家地理』で碉楼群の景観をもつ丹巴の村が中国で最も美しい古鎮の一つに選ばれたことで観光客が増加し、2006年には中国政府の「世界文化遺産預備名録」（世界文化遺産予備一覧表）にも入れられ、観光資源として注目されている。

『青藏碉楼』では、先行研究とその問題点について次のように概説する。1949年以前は任乃強 [2000 (1934)] や馬長寿 [2003 (1942)], 庄学本 [2006 (1939)] らの専門的な研究以外は、多くが紹介にとどまる。このうち馬長寿は漢の冉駹夷が唐の嘉良夷、現在のギャロン・チベット族に繋がることを指摘した上で、ギャロン地区を碉楼の発祥地とする。また庄学本は丹巴県中路郷の碉楼について、これらは金川事変時の遺跡とされるが、地元では碉楼は金川事変以前からあり、一村あるいは一族がそれぞれ防御のために造ったと記す。

中華人民共和国成立後は、民族地区では民主改革や民族識別工作、政治運動が続いたため、碉楼の調査研究が再開されたのは1990年代以降である。しかし碉楼は分布の地域が広くて分散しており、類型が多様であるうえに文献資料が少ないため全面的かつ系統的な研究が欠けていた。また、従来は調査対象が青藏高原東部地域に偏っており、チベット地区やその他の地域についてはほとんど報告されていなかったが、近年はチベットを中心としたヒマラヤ山脈系の調査が進められている [夏格旺堆 2009]。さらに起源については、かつては史学研究における「汎羌論」の影響を受けて西北と西南の古代民の祖をすべて「羌」とし、古碉の建造者も「羌」とする「羌族説」が主流であったが、近年はギャロン族による「土着説」が優勢である。羌族説では、任乃強 [2000 (1934)] が古代の鐘羌とし、孫宏開 [1981] は言語学的視点から羌語支集団と密接に関係する、鄧少琴 [2001] は八角碉が西夏の移民の遷移と関連するとする。一方、ギャロン説は、まず馬長壽 [2003 (1942)] が提唱し、楊嘉銘 [1988] はギャロンのなかでも小金川と丹巴が起源地で、丹巴県中路人を創始者とする。徐学書 [2004] は漢代に南下してきたチャンに備えて冉駹が造ったとし、石碩ら [2012] はそれを嘉絨夷とする。ギャロン説優勢の背景には、丹巴県に最多、多様な碉が集中していることに加えて、丹巴県中路郷罕額依で新石器時代の石積み建築が発掘され、壁石の技術と碉楼の石積み技術の関連が注目されていることによる。

このほか機能や目的については、多くの研究者が軍事的防御とする。馬長壽 [2003 (1942)], 王明珂 [2003] らがそれで、唐代の唐蕃戦争、清の金川事変や土司間の闘争、官兵と土匪、冤家間の絶え間のない戦いに備えて、一族に一つ、一村に複数造られ、見

張りや貯蔵、避難、攻守などの機能を有したとする。これに対して、石碩ら [2012] は総戸数に相当するほど多数の碉楼が密集した地域があることや扎巴の碉房の事例から、原初は人と神を繋ぐ祭祀性をもっていたのではないかと指摘し、牟子 [2002] は早期には戦時の避難と日常生活をおくる家屋としての両用であったとする。

これらをふまえて、青蔵高原碉楼研究の問題点を3つあげる。第一は従来の研究が川西北のギャロン地区に偏っていること、第二は全面的系統的総合的な研究が欠けていること、第三は歴史文化的意味に関する検討が足りないこと、碉楼は孤立した文化遺産ではなく、現地の民族や社会、歴史、文化と関連させて調査研究しなければならないとする。このうち第二、三に対しては第5-12章において歴史、考古学、民俗、宗教、建築技術、文化遺産などの側面から試論が展開されている。ただし第三点に関しては、文化人類学的手法による住民を中心とした現地調査が有効であると思われるが、本書の試論では既報告の民俗的資料を用いる段階でおわっており、一次資料、分析とも不十分である。

もう一つの楊嘉銘論文 [2004] は、碉楼が最も集中する四川省甘孜藏族自治州丹巴県を事例として碉の歴史や分布、民俗性などについて論じたもので、そこで紹介された民間伝承は、碉の民俗性を論じる場合に他の論文で多く引用されている。また碉楼文化の歴史的展開については以下のようにまとめられている。碉は、まず南北朝期に大渡河と雅砻江上流で発達した。唐代に一带が吐蕃に占領された時には、吐蕃の盤熟將軍がこの技術を取り入れて、北は青海・果洛瑪爾曲河の源から南は雲南・中甸まで1020余りの小戦碉を建設して西南の「万里長城」を築いた。元明清代に歴代王朝が土司制度を実施してからは、土司が勢力闘争のために多くの碉を建造した。特に盛行したのは十八土司治世時である。しかし2回の金川事変 (1747-1749, 1771-1726) で多くが破壊され、大渡河流域に現存するのはその残存である、とする。

これは、『青蔵碉楼』で炭素14年代測定の結果として示された各地の碉の建造年や盛行した時代の背景を裏付けるもので説得力がある。例えば、11~14世紀とされる西蔵林芝工布江達区の碉は、唐代にギャロン地区で学んだ技術との関連が推測される。13~15世紀とされるギャロン地区の碉には、蒲角頂の十三角碉 (1280-1440)、八角碉 (1290-1440)、梭坡の八角碉 (1160-1300)、中路の八角碉 (1290-1430) 等があげられているが、これらはその形態からみて戦碉であり、その背景には土司制度における勢力闘争が考えられる。これらは1940年代の調査で、碉は金川事変以前にすでにあったという住民の語りと合致する。

このように、従来の文献資料を主とした碉楼研究に対して新たな視点を加えたのが楊論文や石碩ら論文である。ただし、両者が新たな視点とした民俗伝承については、個人の伝承であるのか集団のものであるのかはっきりしない。また文字化された伝承と個人の口頭伝承 (記憶) との違いにもあまり注意がはられていない。それは、伝承を採取した「場」の状況、すなわち誰が、何時、どこで、どのような状況で、どのように語った

のか、ということ記録する文化人類学的手法がとられていないことによると思われる。

2 碉楼と碉房に関する「記憶」

2.1 碉楼と碉房

石碩らによれば、碉には高さや機能の面から碉楼と碉房の区別がある〔石碩・楊嘉銘・敏立波 2012: 69-80〕。前者は高さ数十メートルで、全村民で建てて共用する「寨碉」や軍隊が建造した「軍碉」である。後者は高さ十数メートルで、「家碉」のある石積み家屋である⁴⁾(写真1)。

また碉房と碉楼の区別を次のようにまとめる。第一に、「碉房」の語は明代の王朝と少数民族の戦いの記事に多くみられ、主に明清時代に使われた。一般に、碉房は三層で、1階は畜舎、2階は居住部、3階は貯蔵処である。それは一般家屋と同構造であったため、川西高原の碉楼分布地区の石積み多層家屋の呼称「籠鷄」でも呼ばれた。なお碉房は碉楼に相対する語として存在する概念であり、古人は碉房と碉楼の区別を次の2点で明確に意識した。その一は高さの違いであり、前者は二三丈(7-10m)、後者は十丈(30m以上)である。その二は、人が居住するか否かであり、前者は人がすむが、後者は住まない。戦闘が増加した清代には、前者は「住碉」、後者は7、8層で各層に銃口がある「戦碉」とよばれて区別された。ただし「毀碉房四千八百」「焚碉房千六百有奇」等(『明史・四川土司』)と膨大な数量が記されていることから、明清時代の碉房には、高層で碉楼の性質ももつ石積み家屋と一般の石積み家屋の2つの形状に対して用いられていたとみられる。しかし近代、特に民国期になると、人々は碉房の本来の意味を理解できなくなって石積み家屋と混用し、その影響は現在の研究者にも一部みられる。第二は、碉房は高さ二三丈で三層構造をもつ石造建築物であるが、これは笨(ボン)教の三段階(篤笨、伽笨、局笨)の第一段階における上中下の「三界」、即ち天神、人界、鬼怪を鎮圧する下界の古い宇宙観と符合する。また上層は、経堂があるだけでなく、経幡がさされ、燵



写真1 四角碉や五角碉と碉房(丹巴県梭坡村 2016年3月, 筆者撮影)。

煙を行う炉竈がある，とする⁵⁾。

実は，礪房はチャン族研究では3層の石積み家屋を意味する語として用いられており，筆者も礪楼に対する語とは意識していなかった。この混用の背景には，チャン族家屋の三層構造がギャロン・チベット族の礪房の三層構造とほとんど同様であることにある。チャン族の場合，家屋の一，二，三階は家畜，人，神（「Nasa」）に分かれ，これは篤笨の天界，人界，下界と対応する。チベット仏教を受容していないチャン族には，上層に経堂や経幡等がない代わりに白石や羊角を置く小塔「Nasa」がある。Nasaは山上では数メートルの塔になり，祭山会の時に神を祀る場所となる。また現存するチャン族の礪楼で最古の黒虎郷鷹嘴河の礪楼群（1320-1350～）は家屋と連なる家礪型である。さらに理県桃坪の礪楼は建造測定年代が清代1660-1950年とされているが，1階が畜舎，2-3階が家屋，4階の平屋根部分に貯蔵処があり，平台の上に2本の礪が築かれた家屋+家礪の兼用型礪といえる。礪の初出とされる冉籠夷の「邛籠」（『後漢書』）はチベット仏教が伝来される以前の形態であり，経堂や経幡がないとすれば，冉籠夷に農耕を学んで定住したという羌（羌戈大戦）のNasaや家屋一体型の礪房は初期の礪を考えるうえで重要である。

2.2 丹巴の礪楼と礪房

「千礪の国」丹巴は，礪楼が最も多く，最も密集する地域である。『青蔵礪楼』によれば，これらは丹巴古礪群とよばれ，1989年に県級，2002年に省級，2006年には国家級の文物保護単位に登録された。県内に現存する礪楼は，343あるいは346，562ともいわれる。このうち最も集中するのが梭坡郷116（梭坡村82），中路郷77（中路村66），蒲角頂村34で，海拔高度2,300～2,700mに分布する。これは「兩年三熟」の伝統的農業地域や，石棺葬など遺跡が発見される地域（海拔2,200～2,700m）とも重なるという⁶⁾。

しかもかつてはもっと多くあったといわれ，楊 [2004] によれば，『丹巴県志』には清の康熙年間に居民戸数4,283戸に対して礪楼は3,000余りで1.1戸に対して1礪の割合であるとし，丹巴は丹東革什咱，巴底，巴旺の3土司の管轄地で，当時最も強大であった明正土司との関係を指摘する [楊 2004]。また中路郷での筆者の聞き取りでは（2015），1950年代には総戸数240戸に対して300～400あったといい，家屋1対礪楼1の比率をはるかに超えている。

では，このような大量の礪楼の数量をどのように理解すればよいのか。かつて丹巴県の文物管理所所長を務め，礪楼の調査や修復を担当したYS(男性62歳，中路村)は次のように語る。礪楼には家礪と寨礪の2種がある。前者は自家用で，家屋に連結し，村人の助けを得て一家で建てる。後者は村の共用で，全村民が協力して建てる。屋外にあるのはほとんどが後者である。家礪は人が日常的に居住し，敵に対しては防御に役立ち，1階は入り口がないので貯蔵にも適する，と。これによれば，住民は家礪と寨礪の違い

をはっきり意識している。前者は家屋より1層或は数層高く建て、家屋と連結して敷地内にある。これに対して後者は、村落全体の防御に関わるためかなり高く、村落にとって重要な場所、中心の広場や防禦に適した場所、或はリーダーの居住地に建てられた。

さらに、YSは第三の礪として軍隊が造った軍礪をあげる。かつて斜面に建つ礪楼を文物管理所が修復した時、その場所は人が立つことも難しい地勢だった。このような礪楼は地盤が強固で容易に壊れることがない、直接巨石の上に建てることもある。四角礪が多く、下方の壁面幅は1-1.5mあるが最上階は30cm位まで狭まって角錐型に建てられており、一般人にこのような建設は不可能である、という。

またQB(67歳、中路郷基卡依村)は省級のチベット式礪楼石匠工芸伝承人で、幾つかの礪楼の修理に関わった。彼によれば、中路郷は丹巴県内で最も豊かな土地である。平坦で肥沃な土地、豊かな水源に恵まれて小麦やトウモロコシ等の食糧、果物などがよく収穫された。そのため外部からの略奪襲撃が頻繁にあり、かつてここでは1万人余りの人が殺されたともいわれ、外敵に対する防禦のための礪楼が多かったという。以上の2人の話によれば、丹巴では家屋と同時に建てる家礪に加えて、防禦用の礪楼が多く建てられ、これが家屋1対礪楼1という比率を超過する大きな要因であったと考えられる。

では、礪房とはどのような形態なのか。『隋書・附国傳』の「無城柵，近川谷，傍山險。俗好復仇，故壘石為石礪而居，以避其患。其石巢高至十余丈，下至五六丈，每級以木隔之，基方三四步，石礪上方二三步，状似浮囹。于下級開小門，從内上通，夜必閉，以防賊盜」によれば、「石礪」は、低いものは五六丈（16～20メートル）で3、4階の家屋より一層ほど高い程度で、一辺が下部は3～5m、上部は2～3mの四角礪で、「居」とあることから居住空間でもあったと推測される。

この形状に近いのが、扎巴人の礪房である。馮敏 [2010] や石碩・楊嘉銘・皴立 [2012: 157-168] によれば、扎巴は鮮水河（雅礮江支流）下流の閉鎖的な峡谷地帯に居住し、人口約1.3万人（2000）、妻問婚を行う母系制など生きる化石と称される古い文化が残る。家屋は高さ十数mの5層或は6層の石積みで、四角礪と連なって建ち、各層の小さな入口で繋がる。四角礪は「拉康」と呼ばれ、経堂、神堂を意味する。神の居る所、神を祀る所である。住民によれば、礪楼を建造する際には家屋と同時、あるいは前後して建てられるなど決まりはないが、人が転居する場合には、家屋は壊してもよいが礪楼は壊すことができない、なぜなら礪楼は神の居る所であり、神は常に内部で活動しており、もし移したら必ず神の怒りをかい、一家に不順なものをもたらすからであると伝えられている。即ち、礪楼と家屋は連なって建っていても機能は全く異なり、前者が神の空間であるのに対して、後者は人の空間であるといえる。

筆者の2015年の丹巴での聞き取りにおいても、礪楼の神性に関する記憶が伝えられている。丹巴県甲居郷のSG(68歳男性)によれば、丹巴の家礪には「連房」型と「靠房」型がある。このうち梭坡と中路は靠房型で、まず礪楼を造って、その後、横に家屋を造



写真2 家礪と礪房(梭坡郷莫洛村 2016年3月,筆者撮影)。

る、家屋の屋上から礪楼に入る(写真2)。

礪楼は独立型であるため、「礪神」が管理する。梭坡型は礪楼部分の空間が狭く、緊急時には家屋側の内部から礪楼に移り、秘密の通路を経て出口に出る。中路のYSの家礪は「東坡」(寶貝石頭)、「鎮寨石」といわれ、家屋の横にある。家屋は、1階は客間で鍋庄(石製の3本脚の五徳)が置かれる、2階は木製校倉式倉庫と衣装や法具などの展示室、3階は平台で、経堂が4階にある。礪楼は4階より1層分ほど高い。YSの家礪における、礪楼を先に造る、礪神がいる、鎮寨石とよばれるという語りは、丹巴で村を開く場合の、まず礪楼を建てて四方の神を鎮めるという「礪」の神力を想起させる。

梭坡郷のWD(29)家の礪楼は6層で、家屋と礪楼が一体となった靠房型である。900～1000年の歴史があり、このような一体型はかつて本村の礪楼の60%を占めていた。その後、なぜか不明だが上部が落ちた、大風に飛ばされたから、ハトやカラスが上で食糧を食べていくうちに分かれたからともいう。ここでは家屋を「母楼」といい、「母礪四併」とよぶ。家屋と礪楼は内部の3層か4層で通じ、出入りができる。この六層楼は外側からみると窓が3つ並び、四面に線が出ている。底層は家畜を入れる層、一番目の窓は鍋庄房(囲炉裏がきられた居間)、2番目が中2階、3番目が2階にあり、さらに窓楼、頂楼がある。礪楼側から内部に入ることはできず、家屋側からしか入れない。このような特徴はこの礪楼にしか残っていない。一説には、この礪楼は東女国時代のともいう⁷⁾。当地のチベット語で「葛母日昭」というが、葛は礪、母は女、日は四个の意味で、4つの礪が並ぶ意である。東女国の都城は海拔3,200m以上の山上にあって、その建造物はみな4面に並ぶと伝えられている。

これに対して甲居郷は連房型で、礪楼と家屋を一緒に造り、礪楼の空間はかなり狭い、双方の部屋を内部で往来できる。第一層は一般に貴重な物を置く、建設時、家屋側の板を礪楼側の中に挿しこんで固定する。家屋と一緒に造るために単独ではなく、完成時に貢巴(在家のラマ僧)に読経してもらって水神や樹神、石頭神、泥神を礪の頂上の四隅に招き、白石と経文旗を置く。「連房」型、「靠房」型とも家屋部分の最上層にある経堂

より1層以上高く造られる。これは、初期築教がどのようにチベット仏教を受容したのか、両者の位置づけを示唆する形態として注目される。

2.3 丹巴の碉楼に関する集団の伝承と個人の記憶

2.3.1 伝説に語られた「碉」

楊嘉銘 [2004] によれば、丹巴では男子が生まれたら石や泥、木材を準備して碉楼を建て、同時に生鉄を碉楼の横の土中に埋める。碉楼を毎年1層ずつ造り、同時に生鉄も打ちこみ、18歳になったら18層の碉楼と鋼刀を成人の印として渡し、一人前となって結婚できる証とする。だから、18歳の成人時に碉楼のない男性は結婚できない、という。楊のこの話は、以後、碉楼の民俗性を論じる論文にはほぼ必ず引用されている。ただし、なぜ碉楼と刀なのかという説明はない。

筆者の2015年の聞き取りでは、丹巴では男子は家屋を所有していなければ結婚できない、そのため父母は男子が生まれたら、すぐに家屋を建てる準備を始めるという。楊の18層の碉楼のことは、18という数字が示唆するように、男子が成人の18歳までに家屋をもつこと、家屋には家碉が連続していることを示すものであろう。18層(40数m)というのは現実的な数値ではないが、18歳=成人男子に意味があり、男子による財産均等分配を反映していると思われる。また鋼刀については蔵族の男性のシンボルといえるものであるが、版本化された康定県朋布西村の伝説では、刀には驅魔の力があるとする。ある村に男児の魂を奪う妖魔が出現して困っていたところ、活仏が法器によってこれを退治し、その後で法器を土中に埋めて言った、今後は男児が生まれたら碉楼と刀を造り、18歳の成人時に完成させて渡し、驅魔の力が備わったとせよ、と語られている [夏格旺堆 2009: 79]。

さらに石碩は、碉楼の力そのものに注目して扎巴の碉楼の例 [劉勇等 2005: 33; 34] を引用する。「碉は、この世界に土地ができた時にすでにある…(碉は)人類の生存を保証するために建てる、なぜなら多角碉のない場所では人類は生存も定住もできず、住居も生命も神秘の力によって破壊されるからである、…昔、天神を祀るために多角碉を建てたが、多角碉は建てるのに十数年から数十年かかった…、八角碉は、最初に造られた碉である、米麻依(人ではない存在)が一晩で建てた、人がある場所に定住する場合には必ずまず碉を建てなければならない、(扎巴では)四角碉は家屋と連なって建てられることが多く、独立して建つのは八角碉が多い」と。

扎巴の碉楼の伝承には移住に関わるものが少なくない。藏彝走廊区に居住する諸集団は六つの大河にそって移住を繰り返したといわれているが、扎巴も例外ではない。移住にあたっては、前の土地の碉楼を破壊してはならない、移住先では必ず新たに碉楼をたてること等が代々伝えられている。また、村落内にある独立型の八角碉は寨碉といえ、村落全体を守る。しかし碉神=寨神ではなく、移住した場合には新たな土地で寨碉を建

て、新たな礪神を招いて村落を守ってもらう。家屋に連なる四角礪は家族を守る家礪であるが、そこに招かれる神は礪神ではあるが家族に付帯して家神になるのではない。礪楼に招かれた神はその土地に属する礪神となる。よって人が移動していなくても、礪楼がある限りそこには神が居るため、礪楼を破壊してはならない。山野の廢墟の中に残る半壊した礪楼は、かつてそこに村落があったことをうかがわせるものである。

2.3.2 梭坡郷，甲居郷，中路郷における住民の語り

もと丹巴県文物管理所長のSD(68)によれば、2003年に県政府は県文化体育広播局や関連部門で工作組を組織し、約半年かけて県内の礪楼調査を実施した。それによれば、丹巴県内には他県より多くの礪楼が集中しており、遺跡79を含めて562に達した。このうち梭坡郷には最多の175（うち梭坡村に82）があり、中路郷に88、蒲角頂郷に34である。形状は四角礪が最多で、十三角礪1、八角礪24、五角礪1である。このうち梭坡には、60mを超えるという最も高い四角礪（1270-1410）と八角礪（1160-1300）がある。種類は寨礪と家礪である。また住民が参拝する経堂礪（1100年頃？）もあり、ボン教の壁画が残されている。

以下では、丹巴でも礪楼が集中する梭坡と新石器時代の石造遺跡が発見された中路、礪楼のある景観が中国で最も美しい村と評価された甲居の3つの村における聞き取り調査から住民の礪楼に対する語りを分析する。

まず梭坡郷莫洛村のZD(63)は1970年代、村内には20を超える礪楼があったが、現在は7つしか残っていないとして、次の2つの話を語る。その一は、当時、村民は礪楼に全く興味がなく、注意もしてなかった。人民公社時代は、みな生産労働に必死で、自分の家屋すら管理することができず、まして礪楼はだれも管理せず、修復もできなかった。礪楼は状態が好いものも壊れたものも、みな天井が崩れ、底がみえた。村民が礪楼に興味がないのは、（礪楼のせいで）平地が少なくなって農作物をほす場所が足りなかったから、また礪楼の上部には鳥が棲んでいて食糧を啄み食べてしまうから、礪楼には蛇がいて不吉だからなどの理由で、礪楼は役にたたないと思っていたからだ。

その二は、改革開放後、皆が家屋を新築しようとして石材がたりなくなったので礪楼が自然に倒壊するのを待ち望んだ。礪楼は自然に壊れたらその石を使ってもよいが、人が壊してはいけない。なぜなら、礪楼には「神性」があり、礪楼を人為的に壊した石を使ったら病気になるからだ。だから皆は礪楼が次第に壊れていくことに心をいためるといふより、むしろ喜んだ。文革の「破四旧」の時ですら、ここではだれも礪楼を壊さなかった。しかし郷内の東風村は外来の漢族が多かったので、その礪楼は壊された。ただし彼らもこの村まで来て壊すことはなかった。私たちは、家礪についてもそれが風水にそって祖先が造ったものである。だから壊したら祖先に対して礼を失い、不遜であると思っている。礪楼は長い年月使われなかったので、大雨が降ると水が四隅に浸透し、

次第に倒れていく。一挙に倒壊するのではなく、まず石が落ち、だんだんと螺旋を描くように崩れていく。礪楼はほとんどが四角形なので水泡ができ、一隅が圧力を受けてある一定程度になると倒壊する。

この2つの語りは両極である。その一は、礪に対して無関心で、興味もなく、食糧を食う鳥がいるとか蛇がいて不吉だと否定的な意見である。これに対してその二は、礪楼には「神性」があるから壊してはいけない。それは自分たちギャロン・チベット族の伝来の感情であり、現在もそれを共有する。またその感情は家礪に対しても同様であるとし、この感情を否定して礪楼を破壊する漢族に対する反感もうかがえる。しかし2話は一見、相反するようでありながら同一線上にあるといえる。ともに礪は人が手を下すことができない、人を越えた存在であるとする意識が共通する。しかし扎巴のように、礪楼には神が居て、神を祀る場所であり、神は動かすことができないから礪楼は壊してはならないという理由付けの伝承はすでにない。「迷信」が否定された時代からすでに2世代を経、神性の内容は伝えられていないが、壊してはならないとする感情の精神的遺産は確実に継承されている。この40年余りに約3分の1まで減少したのは、人為的な破壊ではなく自然倒壊によるものであることがうかがえる。

これに対して中路や甲居では、すでに礪の「神性」の記憶も断片的である。中路のSD(68)によれば、かつて郷内には300~400の礪楼があったが、現存するのは88にすぎず、5分の1まで激減した。1950年代から文化大革命期に多くの礪楼が壊されて、その石が塀や家畜飼育場、穀物干場、家屋の建築に使われたからである。中路では土地が肥沃なため石材が不足し、段々畑の石垣や家屋の建築のために石材が必要だったからだと説明する。当時の礪楼の壊し方は、まず四隅に穴を開け、そこから水をいれて1週間放置すると内側に石が落ちて倒壊する、あるいは爆薬を使ったという。前者は、礪楼が非常に強固なために人為的な破壊が容易ではないことを理解した上の方法であるが、この方法は、最終的に自然に倒壊させるという形をとるものなので、そうであれば石材を使ってもよいという昔からの習慣に違うことはない。しかし、後者の爆薬の使用は、地元民の発想ではなく、漢族あるいは政府側の発想であろう。

甲居も同様に多くの礪楼を壊して利用したという。甲居で蔵家楽(チベット式民宿)を経営するCK(68)によれば、かつて甲居にもたくさんの礪楼があった。人民公社時代にはそれらに価値があることを知らなかったので10数の礪楼を壊してその材料で作物干場や倉庫を造った。90年代までたくさんの礪楼を壊し続けた。礪楼の材料は石材も黄泥もとても有用で、礪楼1つで大きな家屋を造った上に、さらにまだ石材が残った。CK自身の家屋は1968年に建てたが、礪楼を一つ壊してその材料を使った。甥の家屋も同様である。ただし使った2つの礪楼はすでに上部が欠け落ちており、自然に壊れた礪の石は使ってよいとされていたので、上部に上って上から下にむかって崩した、礪楼の石材は片石や小石を積んだ壁角、硝石を含んだ黄泥などみな使用可能で、材料や経費をずいぶ

ん節約できた、特に硝石を含んだ黄泥は家屋の表面に塗ると薄い一層のみで防水可能である。また礪楼は必ず固い地盤に建てられているので、新しい宅地も礪楼のあった場所にした。

1960年代から80年代にかけて、礪楼は高い実利性が注目されて人為的に壊され、再利用された。CKは甲居2村では1950年代にすでに礪楼の重要性が知られていなかったとするが、自然に壊れた礪楼の材料は使ってもよいとされているので半壊の礪楼をみつけたという説明は、あきらかに梭坡と同様の記憶をもっていたことを表している。

一方、中路は、楊嘉銘が中路人を礪の最初の建造者と指摘するほど多様な多数の礪楼があった土地である。YS(62)はもと県文管所長で複数の礪楼の修復も指導しているだけでなく、「鎮寨石」と呼ばれる家礪をもつ家庭で育ており、丹巴の礪楼については最も詳しい一人である。彼によれば、礪楼については大力士が一晩で造ったという伝承があり、1970年代の調査では、中路の経堂礪から70-80斤の生牛皮の鎧や長さ1m超の刀も発見されたという。大力士伝承は、人力を超越した米麻依が礪楼を造ったとする扎巴の伝承と同様である。発見された鎧や刀がこのような伝承に基づいて作られ、奉納された可能性が高い。またある地域では、礪楼は戦いで多くの人々が亡くなった場所なので、その石を家屋に使うのは不浄、不吉であるともいわれているとYSは語るが、それがどこかということは明確にできなかった。

YSが修復した中路のもう一つの家礪は現在公開されていて、観光客も上まで上ることができる。経堂は家屋の平屋根の一隅にある。反対側にはさらに数層が積み上げられて頂上部があり、その四隅にはルンタと白石が置かれて四神を表す。即ち、家礪が経堂より数層高く造られ、そこに石神など自然の神々を招く、神々は経堂内の神より高い処に位置する。礪楼は由来や意味が忘れられたとしても、それが特別なものであるという漠然とした記憶は残っていたことを示している。

3 丹巴県における観光開発と礪楼

3.1 礪楼の保護と修復

礪楼は18世紀の金川事変後に建造が禁止されたため、やがてその意味はほとんど忘れられ、放置された。さらに文革期の1960年代から1980年代までには多くの礪楼が人為的に破壊され、その石材や泥が家屋や道路、共用の畜舎等の建材として使われた。1960年代を境にした放置と破壊には大きな違いがある。放置とは、破壊してはならないという慣習を守ることであり、破壊はそれに反する行為で、破壊を積極的に推進したのが住民自身であったとは考えにくい。聞き取りによれば(2015)、文革期から1980年代までの20数年間に梭坡では人為的な破壊を行わなかったことから175(約31%)が残存し、甲居では10数礪を「価値を知らずに」壊したのに対して、中路では300~400あったのが88

まで激減した。中路における破壊の激しさは現地政府の介入を示唆するものであろう。

しかし、碉楼に対する地元政府の方針は、1980年代以降、逆転した。中央政府によって民族文化尊重の方向が明確に打ちだされたことによる。県政府は、碉楼をチベット族民族文化の一つとし、1989年8月丹巴古碉群を県級文物保護単位に認定した。梭坡のZDやCWによれば、県政府は同時に碉楼の保護を求める文書を出したが、住民への宣伝が不十分であったため、ほとんどの者がそのことを知らなかった。しかし1990年代から2000年代にかけて全国から画家や写真家、観光客が古碉群を見に丹巴に来やってくる、これらが貴重な文化遺産であることを住民に語ったため、彼らも漸くそのことが解ってきた。一方、蒲角頂郷では外地の者（漢族）が碉楼を破壊したことで警察に捕まり、この事件を通して、人々は碉楼を破壊することが違法であることも知った。さらに2000年にはフランスの研究者が炭素測定によって現存の最古の年代を12世紀に遡るとし、記録映画を撮って国内外で展示した。住民は、このような外部者の評価によって碉楼が歴史的文化遺産であることを理解していった。

2000年代に入って、丹巴県政府は本格的に碉楼の保護と観光開発にのりだした。碉楼は2002年に省級文物単位とされ、2006年には国家級文物保護単位に認定されて、世界遺産登録への準備が始まった。県政府は、まず、2003年に県内の碉楼調査を実施した。残存するものは562、約三分の一が梭坡に集中し、早急な修復と保護が必要な碉楼が少なくないことがわかって、2013年までに12碉の緊急的修復を行った。碉楼の20m以内に家屋を新築することを禁止し⁸⁾、斜碉は修復が不可能のため、周辺の家屋に対して補償をだして移転させた。

修復については、財源と伝統技術の伝承が直面の問題である。当初、修復は地元民によって数万円を費やして行われた。梭坡のZD(68)によれば、2004年に県文化館が五角碉の中間の隔層を修復した、県文管所所長のSDが指導し、村の石匠が修復して、経費は1万円弱だった。八角碉の時も大きな空洞を修復したが、経費は県旅游局が出した。しかし2013年に半壊した十三角碉を修復した時には、法律の改正で古建築修復には国家資格が必要となったため県政府は清華大学古建築研究所に依頼して修復し、150万円かかった。以来、村民はだれも自費で修復することができなくなり、資金は国家支給となった。半数以上の者が碉楼は保護が必要であることを理解しているが、その経費あまりにも多額であり、すべて国家に頼るしかない。今後は益々、修復できなくなるだろうという。

修復の技術について、QB(67歳・中路郷基卡依村)は家屋の建設よりかなり難しいと語る。彼は碉楼修復の技術を持つ数少ない石匠の一人で、2007年に県級チベット式碉楼建造技術伝承人になり、毎年県から2,500元(2014年から5,000元)の補助をうけている。伝承人の仕事は、農村や県の重要な修復会議に参加して意見を述べ、実際の修復にあたる。2006年には陽陰碉を3人の技術工と7、8人の弟子とで修復した。碉楼は構造が強

固で基盤が非常に安定しているが、内部の各層の板木が腐り、次第に下に落ち、下部に積もる。雨水を含んで膨張し、小穴が次第に広く裂け、内部に石が落ちていくので空洞の修復と周辺の排水の処理が緊急に必要である。現在、この技術を受け継いでいる弟子は一人しかいない。

QBは妻と娘2人の4人家族で、10畝の畑をもち、7.5畝に飼料用のトウモロコシ、残りに自家用のコムギや大豆、ジャガイモを栽培する。ブタ3頭、牛1頭を飼い、去年はブタ2頭を解体して猪髖（乾肉）を作った。米以外は自給自足である。石匠の収入が現金収入源で2014年は数万元あった。当地では、石匠の技術は必ずしも父祖伝来ではない。合作社時代に4人の若者が選ばれて生産隊の石匠について学んだが、2人は途中でやめ、残ったもう一人は30歳で亡くなったので、QBだけが石匠の完全な技術を継承した。7、8年で「掌墨師」（家屋の設計士）になり、家屋建築を担当できるようになった。家屋建築は農閑期（11～3月）に行い、その後は関外（康定より西のチベット地区）に働きに行き、家屋建設や石垣造り、排水溝修復をし、10月に入って寒くなったら村に戻る。収入は良く、日当は1980年代で20元、90年代40元、2012年以降は60～70円で、40～50人の弟子を連れて働きに行った。現在の家屋は以前より小型になり、部屋数が増えて狭くなった。トイレも屋内に設置し、先進的な技術が必要である。収入はますますなので、私について学びたいという若者は少なくない。礪楼の修復は、確かに国家資格者が指導するが、結局、現地の石匠の参加が不可欠であり、石匠を志す若者たちを礪楼修復の後継者に養成する制度が必要だろう、と語る。

3.2 聶呷郷甲居村の観光開発

2000年代にはいて、丹巴県政府は礪楼の保護を行う一方で、2002年県観光局が「礪楼、藏寨、美人谷」のスローガンをだして、県政府主導のもと本格的な観光開発にのりだした。このスローガンは数十メートルの巨大な礪楼、礪楼と礪房（石造家屋）が織りなす景観、美しいチベット娘の3つを主要な観光資源とすることをアピールしている。本節では、政府主導の観光開発の事例として聶呷郷甲居村をとりあげる。

BS(71歳男性)らによれば、甲居村は、人民公社時代は戸数30数戸、人口約130人で、農業を主とし、トウモロコシや大豆、ソバ、ジャガイモ、圓根大根、二季豆を栽培した。生活はとても苦しく、食糧は年間一人あたりわずか400斤にすぎず、毎食トウモロコシ馍馍が1個だけで、水を飲んで餓えに耐えた。家には布団もなく、服は1枚しかなかった。隊の年間副収入はわずか2,000円で、豚1頭を国家に納めたら炒める油もなく、公糧を送る時には現金もなかった。1980年代に戸別請負制が始まって、ようやく餓えることがなくなった。1990年代には出稼ぎにでて現金収入を得るようになった。山の者は木材の伐採、河辺にすむ者は船夫、技術のある者は石匠になった。農業税も免除され、まずまずの生活になった。2000年代にはいて県政府が観光業を奨励するようになると、村

は大きく変わり始めた。

BS(71)は、県政府機関の退職幹部で、村で最初に民宿を始めた。当時のことを次のように語る。退職後の2001年、県人民政府と党委員会が、彼に村で最初の「旅遊示範(モデル接待戸)」になって、観光業によって富裕になる最初のモデルとなるよう要請した。Y元書記は、まず、BSに建築材料と3万円を提供して3間しかなかった家屋を「藏家楽」(チベット式民宿)に改修させた。最初の客は上海作家協会の20人である。家には床に敷く敷布団や掛布団等の寝具がなかったので他家から借り、さらに掛布団の上にチベット族の上着を掛けた。また地元の民謡歌手を招いて民謡を披露した。客はこれこそチベット文化であるという喜び、宿代を払おうとした。不要だというと、母にとりて1,000元くれた。当時の月給2か月分の現金を手にして、観光業は短期間で楽に稼げるのだと思った。以来、毎日100人以上、多い時には1,000人が家に来たが、ほとんどがちょっと見学するだけで帰った。Y書記は、観光業を行うことはそれによって村民が豊かになることであり、客から金を取らなくてはならないといった。どれくらいの金額をどのようにもらえばよいのかと聞くと、Y書記が食事、見学、果物を食べることの標準価格を作成してくれたので、それを物価局に届けた。当時は一食10数元で、肉類と野菜が数皿あり、酒は無料とした。

当時の最大の問題は、客から金をとる習慣がBSだけではなく、甲居村の住民全体になかったことである。甲居二村のCG(68)も同様のことを述べた。彼は外地で大学教育まで受けた地元を代表する知識人の一人であるが、伝来の意識や習慣を根強くもっており、民宿を始めた当初は客から金はもらえなかったという。かつて甲居村は、ギャロン・チベット族が崇拜する墨爾多神山への巡礼者が通過する土地であり、巡礼者には無償で宿と食事を提供するというのが昔からの習慣だったからである。客への宿と食事の提供は無償であるという旧来の習慣を改めて、それらを有料で提供するのが観光業であるという意識をもつこと、これをY書記らから厳しく指導された。住民にとって観光業を始めたことで最も大きく変わったことのひとつが、このような意識をもつようになったことである。

その後、Y書記はさらに3人の退職幹部を加えてBSに旅遊協会を設立させた。BSは接待戸のモデルとして彼らに布団や食器類のことや接待の仕方などを教えた。観光客が多くて彼らの藏家楽に泊まれない場合は別の家に観光客をふり分けたので、他の村民も現金収入を得ることができるようになって、この方法を支持した。さらに60人の踊り隊を組織し、政府の上級幹部が訪れるたびに伝統的なチベット踊りを披露し、無償で酒や机、テントを用意した。毎日数回上演したので疲れたが、客は喜んでくれた。上演は2001年から2008年まで続けた。その間、多くの観光客が来たが、村までの道路は車の通行ができなかったので、客は村まで歩いて来なければならなかった。しかし村民たちは観光客がやってくるのを見るときも無償で果物を贈って歓迎したため、このような風習が

多くの客を引き寄せた。

また、BSたちの旅遊協会はどのように観光を発展させれば、自分たちの伝統文化を同時に保護できるか検討した。その結果、蔵家楽の規模をあまり大きくせず、一軒あたりの客を最多でも30人とすることを提案した。客が多すぎれば十分な接待ができないし、ゴミも過剰になり、宿自体が機能不全に陥るからである。ところが2005年に『中国国家地理』で甲居村が「中国で最も美しい古鎮」と紹介されると、一挙に観光客が増えた。増加する観光客に対応するために従来の30人という小規模の蔵家楽ではなく、100人規模の大型蔵家楽「三姐妹」が出現した。「三姐妹」は多くの観光客を受け入れて利益をあげたが、一方でゴミや廃水等の問題を起こして、BSらの旅遊協会と対立した。その対立の様子は、数年前、中央テレビ台の取材をうけて全国に放映された。県政府は、旅遊協会側が番組内で県政府を批判したことを問題視し、以後、協会に対して従来の活動任務を認めないとした。そのため旅遊協会は事実上、廃会となった。県政府の方針も観光事業の拡大を目指したからである。

BSはこれまでの経験から次のような教訓を得たという。観光業は、収入はまずまずであり、自身の蔵家楽の年収も20万に達した。また村では、土産物の購入や農家楽での雇用などで農家楽経営以外の村民にも利益がもたらされた。自身も踊り組を企画して参加したことで国内外の知識や教養のある専門家に接して様々なことを学ぶことができ、気持ちも若返った。しかし観光業にはリスクも伴う。初め、村人に対して観光業にはリスクがなく簡単に利益を得られると話したが、今はリスクが大きいと思う。第一は飲食面。不衛生であれば必ず問題がおきる。また村の公認ガイドや運転手が高額の代金をふっかければ客はネットに投書して、あつというまにそれが知れ渡る。第二は宣伝。客の蔵家楽に対する要求はますます高くなり、旅行社はシャワー24時間使用可などとうたい、それを蔵家楽側に要求してきた。蔵家楽側は、初期の蔵家楽であればあるほど高額な設備投資が必要となっている。第三は高山病。すでに死者が2人でている。特に若者は安全に注意しないで遊びまわるので危険だ。忘れ物も大問題になりやすい、と。

2013年、甲居村では観光開発を統括する企業として「川旅集団」(以下、川旅と記す)にサービス業務を委託した。背景には次のような事情がある。村は2005年に中国で最も美しい村と紹介されて以来、観光客が激増し、特に7～10月の観光シーズンには毎日、ゴールデンウィーク並みの客が押し寄せている。また団体客が減って、ネットでの宣伝をみたマイカーの個人客が増加し、その要求は益々高くなっている。甲居二村のCS家も3～10月までいつも満室のため、外観はチベット風で内部は現代的な設備を備えた大型民宿を新築中である。従来の蔵家楽は施設面やサービスなどで改善を迫られている。このような観光客の激増やそれに伴う蔵家楽の巨大化、設備投資への要求などから村内では環境衛生面などに様々な問題が生じており、個人での解決が難しくなっている。川旅の導入は、個人レベルを超えた観光企業による高度な平準化を意図している。ただし

川旅の社長はもと県政府の宣伝部長であり、県政府主導という形はそのまま継続されている。

川旅の主な仕事は、村への入場料を徴収し、その収入で散歩道を新設し、家々までの舗装道路を造り、村内の環境衛生やゴミの収集をうけおって環境整備を行うことである。これは環境衛生面に大きな効果をもたらし、きれいな街並が整備された。入場料は初め30元だったが、2015年5月から50元になり、一部が村民に配分される。以前は総収入の15%が甲居村民のみに分配されたが、現在は郷の全村に分配される。各村は年間売上300万円の15%では少額なので、50%への引上げを県政府と交渉していたが、幹部が逮捕されたためその話はたち消えとなった。また、川旅は村の入口に家屋を借り、外観は従来の伝統家屋風で、内部の4部屋を現代風に改造して公認ガイドの待機所とした。ガイドは旅游局や州政府、県政府主催の訓練を何度も受け、試験を経て正式のガイドとなる。みな若者で、証明書をもつ者は20人、1回の案内は50元。証明書のない説明員も10数名いる。

しかし、なお問題は少なくない。第一は価格の統一化が十分ではないこと。物価局は夕食朝食付きの宿泊代を100元と規定しているが、蔵家楽の設備などによって高いのも安いものもある。第二は環境に深刻な影響がでていること。例えば一部の蔵家楽は汚水を未処理のまま垂れ流している、下水管は設置されているが使われていない。また蔵家楽を経営していない者は自分の土地内に汚水池を掘ることに同意していない。BSは汚水池を庭に2個ほって2回処理し、庭の樹木に流す。第三は飲料水である。当地は昔から水不足の問題が深刻で、旱魃になると人も家畜も飲料水にこと欠いた。2014年は旱魃に遭い、給水車がでた。また幾つかの蔵家楽は自分の所で泉水をせき止めたため、下流への水が止まった。県政府は川旅を使って村落全体に及ぶ問題に対応させ、観光の水準向上をめざしている。

このように、県政府は観光開発に企業を参入させることによって、観光業の中心的役割を地元民（退職幹部）から企業集団に転換させた。2005年以降の観光客激増を契機に、観光開発の形態は「県政府+地元民」から「県政府+企業+地元民」に変わった。これは従来の小規模経営による観光の質的向上から、大規模経営による量的拡大と質の統一化、収入の増加に県政府の方針が変わったことを示している。

では、今後、甲居村ではどのように観光開発が進められていくのか。政府の関与、住民の参画、企業の役割はどのように展開されるのか。2014年、甲居村は戸数約50戸、人口約150人で、60年前と比較して微増である。BSによれば、観光開発の進展とともに道路が整備され、観光業への多様な参加によって利益を得る者も増え、全村的に暮らし向きがよくなった。村民の約30%が個人で車を所有し、バイクは100%以上の普及率である。かつての土司や頭人よりもはるかによい暮らしをしているとBSは笑う。

BS自身の生活も変わった。BS家は、本人（71、中学校卒）と妻（67、小学校卒）、2

人の息子と娘の5人家族だったが、全員家をでており、現在は2人暮らしである。長男は中学卒業後、武装部で働き、2人の孫娘は色達衛生局務めと大学1年生。娘は本村に嫁ぎ、接待戸を経営。次男は大専卒業後、放送局に務め、既婚だが子供はいない。耕地は3畝で自家用に小麦とトウモロコシ、野菜を栽培、5畝を退耕還林してリンゴやナシ、クルミを栽培する。ブタは4頭、昨冬は5頭殺して年猪にした。牛は4頭。2001年に村内で最初に蔵家楽を始めた。2014年の年収は20万元。客用に村内の農家から海椒やナス、油菜、白菜、豆類、大根などを買い、鶏の卵は村内では不足しているので県城の市場で買う。村の女性2人を月給2,000円で雇っているが、勤務時間が10~19時で朝・夕食の繁忙時とずれるため、2016年からは県内他地域のチベット族を雇う予定。漢族は農作業ができないので雇わない。2014年に川旅集団から家屋の請負について打診があった。請負料は年に7万元。すでに村内の民宿13戸が川旅集団の請負を承諾しており、BS夫婦も受けることにした。すでに年老いてこのまま2人で蔵家楽を続けることは難しく、子供たちは全員独立して家に戻る予定もない、今後も様々なリスクが増えるだろうから、収入は三分の一に減少するけれど2人で暮らすには十分なので、と語った。

以上のように、2000年代に入って観光開発や出稼ぎなどで収入が増えて生活水準が向上したが、若者は外地で義務教育以上の教育を受けてそのまま都市で働くようになり、村に戻る者は少ない。早期に蔵家楽を始めたBSのような家庭では後継者がおらず、観光客の要求が年々高くなって設備投資の負担も少なくない。川旅や県政府がめざすのは、古くて小規模の蔵家楽を請負うことで施設面や接待マナーの統一化規範化を進め、質量の向上によって観光客をさらに受入れ、利益を増やすことにある。しかしそれによって村の観光地化はより加速され、利益が増える半面、住民の生活の場は狭まっていく。観光開発の当初の目的は、村民自身の生活を豊かにすることにあつたはずであるが、現状ではすでにその目的を越えて観光客の目線にあわせた観光化で動いている。地元民自身はどのような発展を望んでいるのか、川旅集団や県政府は本村の観光開発の到達点をどこに置いているのか、住民の生活の場という視点がはいっているのか、不明である。

3.3 梭坡郷莫洛村の碉楼観光

梭坡では、甲居や中路とはやや異なる観光開発が進められている。丹巴県観光局のスローガン「古碉、藏寨、美人谷」は、碉楼を観光資源の第一と位置づけている。しかし碉楼が残る甲居や中路、梭坡の3地点のうち、甲居や中路では、碉楼は重要な景観ではあるものの、豊かな自然やチベット式の食事、住まい、歌や踊りにみるチベット文化の体験が観光の中心である。これに対して、最多の碉楼群をもつ梭坡のみが碉楼観光を看板としている。

では、唯一、碉楼を観光の中心にすえた梭坡では、碉楼の記憶はどのように再生され、観光資源として利用されているのか。梭坡郷は、戸数約600戸、人口約3,000人で、11の

行政村からなる（2014）。县城から7km西に位置するが、近年まで县城に繋がる幹線道路へのアクセスが極めて悪かったため、経済的にも観光開発においてもでくれた。莫落村は総戸数約30戸、総人口約120人で、河辺に位置し、かつて村の男性は船夫になって河川運輸に従事した。主な産業は農業で、トウモロコシや小麦、チンクー麦を栽培して自給し、花椒やクルミ、ザクロを経済作物とする。

县城に近く、有数の礪楼群をもちながら、数年前までは村に通じる道路事情があまりにも劣悪であったため観光客も稀で、観光開発は考えていなかったと住民はいう。7、8年前に藤縄の橋が壊れた時に梭坡の4村が連名で橋の建設を県長に陳情して鋼鉄橋が完成し、2000年代にはいってようやく国道と村の入口までの道路が通じた。しかし、礪楼群までの道はまだ車の通行可能な道路ではなく、客はほとんどが遠くから礪楼群を眺めるだけで帰った。そこでMら地元の観光にかかわる10数戸が5,000元ずつ出しあって自分たちの力で礪楼群までの土砂の道をつくり、さらにWDら7戸がそれに繋がる同様の道を造った。道路が通じて後、観光客も少しずつ増え始め、観光に関わる村民の収入も増えてきた。まさに自力更生の観光開発である。しかし、舗装道路ではないためマイカーの乗り入れが不便で、駐車場の整備も遅れていることから客数は中路や甲居に比べてはるかに少なく、戸別の観光収入の平均も10分の1程度にすぎない。

莫落村で最も順調に蔵家業を営むCM家は次のようである。CM(52歳)は高校卒業後、1983～87年まで映写技師として梭坡郷内を巡回したが、映写業が廃れてきたので農民にもどった。妻(49歳)と2人の娘がいる。長女(中卒)とその夫(小卒)、3人の孫と暮らす。孫の一人は瀘州医学院を卒業して县城で働く。次女は大学卒業後、公務員に合格して雅江県衛生局に務めている。若者世代の学歴があがって農村に戻らなくなる傾向は、全村的にみられる。2.8畝の畑がある。1畝を年間2,000円で葡萄園に貸し出し、5年後に葡萄生産が軌道にのったら売上の30%をうけとることになっている。残りの1.8畝でリンゴを栽培し、トウモロコシ(1,500～1,600斤、飼料用)と小麦(1畝あたり400～500斤)を間作する。ブタ9頭と鶏を飼う。

蔵家業を始めたのは、2003年に礪楼を見に来た画家一行が、礪楼は「無価之宝」だから将来、必ず観光客が増えて利益を得られるようになるといったので旅遊局に申請して蔵家業を始めた。旧家屋は狭くて、客は6人しか泊められなかった。2003～2009年の6年間は、客は少なかったが多少の貯蓄もできたので、2009年に新築を決断し、リンゴ栽培の利益とあわせて1万6千円で材料を購入し、20床の新家屋を建てた。CM家には礪楼はなかったが、村内で礪楼はあるが民宿をしていない4～5軒と協力して礪楼見学ツアーを行う。6～10月の間はほぼ満室で、その他の季節も毎日7～8人の客がある。年収は数年前までは2～3万円だったが、2014年には3～4万円に増えた。当面の問題は資金が足りないために建て増しができず、ゴールデンウィーク時にはかなりの客を断らなくてはならないことだ。またこれまでは道が悪くてマイカー客に不評だったので、10

数戸がそれぞれ5,000元ずつ拠出して道路を造った。道ができてからは、車もすぐ近くまで上ってこられるようになった。価格は政府の指導を受けて、食事は30～40元、一泊食事つきで100元だが、限られた客数を奪い合うので1泊80～90元に値下げしている。CM家は、規模は村内では2番目だが、客は一番多い。食事がおいしくて衛生条件がよく、家の前に有名な四角礪があっていつでも見られるからだ。週末には県城から来る客も多いので、将来的には礪楼だけではなく、生態環境の良さや大峡谷などの自然も観光資源にしたい、という。

莫洛村にはかつて20数の礪楼があったが、現存するのは7つである。数十メートルの五角礪等の寨礪と家屋と一体型の家礪がある。一体型はかつて本村の約60%を占め、1千年前後の歴史があるという。複数の家礪が公開され、屋内には鍋庄やバター茶を作る道具、壁には「三好学生」賞状などの張り紙が残されており、70年代までの生活を想起させる。礪楼群を看板とする観光業は、住民たちが自発的に始め、近年は郷政府が支援している。数戸の蔵家楽のほか、地元民が担当する県政府公認ガイドや郷政府派遣の観光事業補助員が礪楼に案内する。

WD(29)は県旅遊局の公認ガイドである。家は代々小頭人の家系で、家屋と一体になった6層の家礪に1970年代まで両親と兄、姉、自分の5人が暮らしていた。底層で家畜を飼い、2階に出入り口と鍋庄房（囲炉裏のある居間）がある、3、4階から家礪に入ることができる。5階は経堂で、神棚の木板にはボン教の絵が描かれている。以前、ここに来た外国人が経堂のボン教の板絵を一枚千円で買っていったが、貴重なものだとわかれてからは売らないようにしている。経堂の層からさらに数層積み上げた高さ到家礪の頂上部がある。WDは毎朝、幹線道路に通じる大橋の横で旅行客を待ち、自家の家礪や寨礪である五角礪、村内を案内して礪楼の由来や構造を解説する。家礪に住んでいたのもその構造は良くわかっている。ガイドの公定料金は一人30元。家には2.5畝の畑があり、2,000円で葡萄園に貸し出している。稼いで家屋を新築することが今の望みだという。

ZD(63)は郷の観光事業補助員である。小卒で、1975年から農業に従事するかたわら農業技術員を兼任し、2004年に正式の農業技術員となって2014年に退職し、観光事業の手伝いを依頼された。息子2人と娘がおり、次男一家と同居。畑3畝のうち1畝を2,000円で葡萄園に貸し出し、残りで自家用のトウモロコシと小麦を栽培する。豚3頭（子豚6）、乳牛1頭を飼う。2013年に息子と婚が36万円で工事車両を購入、14年に借入金を返済し、2015年は2万円の収入があった。嫁が果物を栽培して5,000円の収入があり、息子は4か月出稼ぎに出て2万元稼いだ。今冬に家屋を新築して次男に蔵家楽を経営させたいと思っている。

ZDによれば、梭坡には他の2村のような県政府機関の退職幹部がいなかったのも、県政府から積極的な観光開発の支援がなく、道路も自分たちで造らなければならなかった

という。住民は、碉楼群に対する外部の高評価を得て漸く碉楼や家碉の重要性に気づき、周辺の観光開発を見て観光事業を始めた。まさに自力更生そのものであるが、出遅れた分、住民主体のプロセスがみられる。また家碉が最もよく保存され、そこでの暮らし方やボン教との関わりがガイドによって説明され、景観としての碉楼ではなく、碉楼文化を伝えるという他の2村にはない特徴がある。

碉楼観光については、軍碉と紅軍を結んだ革命観光もみられる。甲居二村の甲居口にある防御碉は、清代の巴旺土司が金川と巴底への通路を守護するという「駐兵守御」のために建造した碉楼である。大金川（大渡河系）沿いの眺望のよい山腹に位置する。民国期には紅軍が来て土司を追い出し、ここに駐屯した。紅軍が去った後に当地の保長の楊爾杰が居住した。楊保長はセムシであったが威望があった。人民共和国成立後、碉楼周辺には水源も耕地もなかったために住民に分配されなかった。合作社時代には管理する者がなく放置され、1980年代に崩壊し始めた。しかし2000年代に紅軍駐屯の革命記念地として修復整備された。13層で下に入口がある。会議場や銃火薬庫、共産党幹部の寝室、銃口窓、地下への秘密路などが各層に配置され、戸外の軒下には一般兵士の寝床が並ぶ。

おわりに

本稿では、「碉」が最も集中する四川省甘孜藏族自治州丹巴県の梭坡、甲居、中路の碉楼を事例として、従来の碉楼研究ではほとんどふれられなかった2つの視点、第一は家碉、第2は碉楼にまつわる村民の記憶や語りから「碉」の意味を再考し、さらに近年、急激に進む観光資源化において碉楼がどのように利用されているか分析して、以下の点を明らかにした。

家碉と碉楼にまつわる村民の記憶や語りの視点からは、先行研究（第1章）と碉楼と碉房に関する「記憶」（第2章）で論じた。「碉」は初出の『後漢書』にすでに高さの高いもの（寨碉あるいは軍碉）と低いもの（家碉）があることが記されている、しかし後の研究は主に前者であり、後者はほとんどとりあげられなかった。金川事変の軍碉の印象が後の研究に大きな影響を与えたものと思われる。しかし近年、碉楼の本来の意味として指摘された神性と初期ボン教と繋がる神を祀るという点は、扎巴人の家碉や移住にまつわる伝承、筆者のききとり調査でも明らかのように、家碉を家屋より数層高くして神を祀るという造り方や構造、移住時に旧地の碉は壊さず、移住先でも新たに造るという伝承、文革時に明らかになった破壊行為や人の手で破壊してはならないという村民の漠然とした断片的な「記憶」の中に明確に示唆されている。

第二の「碉」の観光資源化については、まず碉楼が時代によって統治者から異なる評価や命命を受けたこと、住民はそれを受け入れる一方で、その意のままに動くわけでも

なかったことを明らかにした（第3章）。金川事変以降、清王朝が建造禁止令をだすと、住民はそれを受け入れて、放置する。文革期は地元政府の命令をうけて、地域によって破壊する村と破壊しない村が併存する。しかし1990年代から政府の評価は逆転する、ユネスコ理論という外部の評価に基づく歴史的価値の認知と資源の格付け、保護修復が政府によって進められる。2000年代以降、県政府は「古礪、蔵寨、美人谷」のスローガンを掲げて積極的に観光資源としての利用を始め、観光客の視線にたつ大規模な観光地化をめざしている。その典型的な例が甲居における企業の仲介による統一的な観光開発である。そこにはすでに住民のための生活環境や伝統文化の維持という視点は薄い。これとはやや異なるのが、礪楼の神性に対する意識を村民全体で潜在的に強く共有し、礪楼群や家礪を最も残存させた稜坡である。閉鎖的な環境のために経済発展に出遅れ、観光開発を諦めていた村民が、自力更生的に礪楼文化を中心にすえた観光業を始めた。観光事業の主体者の違いが、「礪」という伝統文化の位置づけの違いとなっている。稜坡の「礪」の解説で興味深かったのは、70年代までの暮らしや歴史、ボン教と神性という視点が新たに加えられていたことである。

今後の課題としては、礪楼の意味を再考するために、家礪の形態とそこにおける旧来の生活習慣をよく保持する扎巴の調査を進めることにある。しかし扎巴は甘孜藏族自治州のチベット族居住地として、現在は外国人研究者の研究調査が許可されていない。国内研究者の調査報告を待ちたい。

注

- 1) 蔵彝走廊地区とは、費孝通が、1978年9月の全国協商会議上で1980年代の第2回民族識別工作を背景に、後の「多元一体格局論」に先がけて提唱した理論である。四川、雲南、チベット自治区に跨る横断山脈を南北に貫通する六つの大河流域は、古来より様々な民族集団が移動と融合を続けた地域で、複雑な民族構成や言語系統、巨大な礪楼や白石信仰など古層の文化がみられる。費孝通が民族識別問題に関連して「民族走廊」という概念を提唱し、それをうけて中国西南民族研究学会が1982年に「六江流域民族総合科学考察」の調査を実施し、2008年にはそれらと後の成果をまとめた「蔵彝走廊研究叢書」（民族出版社）が編集刊行された。
- 2) チャン族とギャロン・チベット族については松岡 [2000] [2017] 参照。
- 3) 本書の扎巴人については、石碩ら [2012] が引用する劉勇・馮敏ら [2005] や馮敏 [2010] による。
- 4) 礪房について、熊梅は、「石室」が礪に発展したとし、殷商期の蚕叢の「石室」が、後漢・冉駹夷（岷江上流域）の「邛籠」、隋代・附国（大金川流域）の「石巢」、唐代・黎、邛州（大渡河中游流域）の「礪舍（房）」、宋代・茂州の「籠鷄」（高さ十数m、数十mは礪）、明代・天全や松潘の少数民族の住居「礪房」、清代・茂州の礪房と籠鷄、天全の礪楼と礪房（土製平屋根住居）に発展したとする [熊梅 2015: 125-128]。
- 5) ボン（笨）教は、チベット高原に仏教が伝えられる以前の土着の原始宗教であるが、現在いわ

れるボン教は、チベット語文献やボン教典籍の記載によれば3つの段階（篤笨、伽笨、局笨）を経たものであるとする〔石碩ら 2012: 178-184〕

- 6) 横断山区系の類型に関するデータは石碩・楊嘉銘・皸立波〔2012: 89-122〕による
- 7) 東女国については、近年、丹巴県梭坡郷莫洛村内にギャロン・チベット族との関わりを説明する説明板がたてられ、観光資源の一つとされている。なお文献資料については、冉光荣ら〔1985: 158-164〕に『隋書・女国伝』『大唐西域記』『新唐書・吐蕃伝』などを引用して蘇毘（女国）のことを記す。また山口〔1988: 13-16〕などにも詳しい。
- 8) 碉楼周辺の家屋新築禁止令については、はじめは50m以内としたが、梭坡郷のDZの旧家屋が八角碉の横にあって移転場所を見つけないことができないとして文管所にかけあった結果、20m以内に修正された（2015年聞き取りによる）。

参考文献

范 曄

1965 [445] 『後漢書』北京：中華書局。

鄧少琴

2001 「西康木雅西吳王考」『鄧少琴西南民族史地論集』成都：巴蜀書社。

馮 敏

2010 『扎巴藏族—21世紀人類学母系制社会田野調査』北京：民族出版社。

紅 音

2014 「嘉絨藏族碉楼考察と思考」『西南民族大学学報（人文社会科学版）』2014年第8期, pp. 55-59。

李延寿

1975 [659] 『北史』北京：中華書局。

劉勇・馮敏等

2005 『鮮水河畔的道孚藏族多元文化』成都：四川民族出版社。

羅 勇

2016 「工布江達県楼文化探析」『西藏研究』2016年第4期, pp. 79-82。

馬長寿

2003 [1942] 「嘉絨民俗社会史」『馬長寿民族学論集』pp. 123-164, 北京：人民出版社。

松岡正子

2000 『チャン族と四川チベット族—中国青藏高原東部の少数民族』東京：ゆまに書房。

2017 『青藏高原東部のチャン族とチベット族—2008汶川地震後の再建と開発』名古屋：あるむ。

牟 子

2002 「丹巴高碉文化」『康定民族師範高等専科学学校学報』11(3): 1-6。

冉光荣・李紹明・周錫銀

1985 『羌族史』成都：四川民族出版社。

任乃強

2000 [1934] 『西康図経・民俗篇』拉薩：西藏古籍出版社。

石碩・楊嘉銘・皸立波

2012 『青藏高原碉楼研究』北京：中国社会科学出版社。

四川省甘孜藏族自治州丹巴縣志編纂委員會

1996 『丹巴縣志』北京：民族出版社。

孫宏開

1981 「試論“邛”文化与羌語支語言」『民族研究』1982年2期, pp. 53-61。

夏格旺堆

2009 「西藏高碉建築鄒議」『西藏研究』2009年第5期, pp. 72-80。

熊 梅

2015 「歷史時期川西高原的民居形制及其成因」『中国歷史地理論叢』30(4): 125-138。

徐學書

2004 「川西的石碉文化」『中華文化論壇』2004年第1期, pp. 31-36。

山口瑞鳳

1988 『チベット (下)』東京：東京大學出版會。

楊嘉銘

1988 「四川甘孜阿壩地區的“高碉”文化」『西南民族學院學報 (哲學社會科學版)』1998年第3期, pp. 25-31。

2004 「丹巴古碉建築文化總覽」『中国藏學』66: 93-103。

王明珂

2003 『羌在漢藏之間——一個華夏歷史邊緣的歷史人類學研究』台北：聯經出版。

魏徵

1975 [636] 『隋書』北京：中華書局。

庄學本

2006 [1939] 『羌戎考察記——攝影大師庄學本20世紀30年代的西部人文探訪』成都：四川民族出版社。

2009 [1939] 「西康丹巴調查報告」『庄學本全集』pp. 482-487, 北京：中華書局。